

ローマ人への手紙15章8-32節 「異邦人のための仕え人」

1A 賛美 8-13

1B ユダヤ人のしもべ 8

2B 異邦人の賛美 9-13

2A 宣教の旅程 14-29

1B 異邦人のささげ物 14-16

2B これまでの神への奉仕 17-21

1C キリストにある誇り 17-19

2C 語られていない場所での福音 20-21

3B これからの働き 22-29

1C イスパニア道中での訪問 22-24

2C エルサレムでの奉仕 25-29

1D 貧しい聖徒たち 25-27

2D キリストの祝福への期待 28-29

4B エルサレムへの旅のための祈り 30-33

本文

ローマ人への手紙 15 章 8 節からです。パウロは、15 章 7 節において、教会の人々に対する勧めと教えを終えました。「⁷ですから、神の栄光のために、キリストがあなたがたを受け入れてくださったように、あなたがたも互いに受け入れ合いなさい。」であります。ユダヤ人と異邦人が、キリストになって一つになっていて、共に神をほめたたえている姿は、まさに神の栄光を現わしており、神の御国の姿であります。8 節から 13 節には、異邦人も加わった神への賛美を語り、14 節以降は、自分に対する神の召命、異邦人のために仕える使徒となったのかを話していきます。この手紙の冒頭で、「1:5 この方によって、私たちは恵みと使徒の務めを受けました。御名のために、すべての異邦人の中に信仰の従順をもたらすためです。」彼は、自分の宣教の旅を具体的にローマの信者たちに伝えます。その中で、彼の働きの姿勢の中で、多くのことを学び取ることができます。

1A 賛美 8-13

1B ユダヤ人のしもべ 8

⁸ 私は言います。キリストは、神の真理を現すために、割礼のある者たちのしもべとなりました。父祖たちに与えられた約束を確証するためであり、^{9a} また異邦人もあわれみのゆえに、神をあがめるようになるためです。

神のユダヤ人に対する働きと、それから異邦人に対する働きのどちらをもパウロは記しています。

これは、異邦人信者はユダヤ人に対する神の働きをしっかりと思い、ユダヤ人信者は異邦人信者に対する神の思いをしっかりと見ていく必要があります。午前礼拝で見たように、自分のことだけでなく、他者のことを顧みるのがキリスト者の持つべき態度だからです。

ユダヤ人については、私たちの信じているキリストは、「割礼のある者たちのしもべとなりました」となられたということです。イエスは、ユダヤ人であられたということです。十二使徒たちも、すべてがユダヤ人ですし、旧約聖書はもちろんのこと、新約聖書も、福音書はすべてイスラエルでの出来事、使徒の働きも 13 章の、アンティオキアの教会からパウロとバルナバが遣わされるところまでは、イスラエルでの神の働きです。ですから、異邦人の信者は、イスラエルに対して、ユダヤ人に対して誇ってはいけないということですね。11 章で、私たちこそが、神のイスラエルに接ぎ木されているのであって、その反対ではないということです。「彼らは、神に逆らっていて、イエスを信じていないから、改宗させなければいけない。」という態度ではなく、「彼らは、神が働かれるなら、憐れむなら、私たち以上にはるかに、容易に元に戻る人々。」と見なければならぬのです。

そして、イエス様は「割礼のある者たちのしもべ」になりました。パウロは、割礼を受けているということ自体を否定しているのではなく、割礼を神によって義と認められるしるしとして頼ることを否定していました。しかし、割礼について否定的なことを聞いて、割礼そのものが間違っているかのように捉えたら、間違いです。私たちの主ご自身が、生後八日目に割礼を受けておられるはずなのです。割礼のある者たちを受け入れておられたところか、その中の一人になって生きておられました。

そして、「父祖たちに与えられた約束を確認するためであり」とあります。これは、使徒の働きを読めば、パウロがユダヤ人たちに主張している中で何度となく出てくる言葉です。例えば、ヘロデアグリッパ二世に対して、このように弁明しています。「使 26:6-7 そして今、神が私たちの父祖たちに与えられた約束に望みを抱いているために、私はここに立って、さばかれています。7 私たちの十二部族は、夜も昼も熱心に神に仕えながら、その約束のものを得たいと望んでいます。王よ。私はこの望みを抱いているために、ユダヤ人から訴えられているのです。」ローマ書でも、冒頭で、「1:2-3b この福音は、神がご自分の預言者たちを通して、聖書にあらかじめ約束されたもので、御子に関するものです。」と書いています。

そして、さらに「異邦人もあわれみのゆえに、神をあがめるようになるため」なのです。私たちはローマ書でずっと見てきましたが、本来、神の契約や約束からかけ離れていた私たち異邦人を、神は憐れみのゆえにお救いになりました。それもまた、神の永遠のご計画の中には組み込まれていましたが、神の特別な取り計らいで、憐れみで救ってくださったのです。私たちはここを、心に刻みたいと思います。神の豊かな憐れみで救われたのだ、ということ。そして 6 節に、「心を一つにし、声を合わせて、私たちの主イエス・キリストの父である神をほめたたえる」と書いていま

したが、パウロは、それはユダヤ人だけでなく、異邦人も交じって、心を一つにして、声をあげてほめたたえることなのだ、と言っています。

2B 異邦人の賛美 9-13

^{9b}「それゆえ、私は異邦人の間であなたをほめたたえます。あなたの御名をほめ歌います」と書いてあるとおりです。¹⁰ また、こう言われています。「異邦人よ、主の民とともに喜べ。」¹¹ さらに、こうあります。「すべての異邦人よ、主をほめよ。すべての国民が、主をたたえるように。」

これらは、すべて旧約聖書からの引用です。私たちの持っている聖書では、旧約聖書は「国々」と訳しているところが、ここでは「異邦人」になっていますが、そういう意味です。これは、ユダヤ人の人たちには、大きな挑戦となります。ユダヤ人、またユダヤ教には、ユダヤ民族であれば契約の民であり、ほぼ自動的に神の国に入れる、救われると考えていました。異邦人は、ユダヤ教に改宗しなければ救われないと考えていました。ところが、そのような考えの中で、イスラエルが実は国々の光としての使命があり、国々、異邦人が神をあがめるようになるという使命が、このように何度となく書かれているのに、それを見失ってしまったのです。しかし、異邦人は異邦人のままで神をあがめることが、こうもはっきりと書かれているのです。私たちは、どうでしょうか？自分が神をほめたたえる、自分たちが神をほめたたえることは考えますが、人々にそれを見せていき、人々がその中に加わるというところまで考えているでしょうか？一度、野外で賛美をしていいかもしれませんね！

9 節は、詩篇からの引用ですが、サムエル記第二の最後で、ダビデが晩年に主をほめたたえたところの引用です。10 節はモーセの晩年に歌った歌、11 節は詩篇 117 篇からです。ダビデも、モーセも、どちらも積極的に異邦人が主をほめたたえることを勧めており、つまりは、異邦人にも憐れみが注がれていることを語っていたのです。ところで、ここで興味深いのは、異邦人が次第に主の民となっていることです。初めは、ダビデ自身が異邦人の間で主をほめたたえています。異邦人はただ、その賛美を聞いているだけです。それから、次は、主の民と共に喜べと異邦人に命じている部分です。まだ主の民にはなっていないけれども、共に歌いなさいということです。そして次に、異邦人自身が、主をほめよと呼びかけられていることです。彼ら自身が主の民となっています。このようにして、宣教が進んでいるのです。

¹² さらにまたイザヤは、「エッサイの根が起こる。異邦人を治めるために立ち上がる方が。異邦人はこの方に望みを置く」と言っています。

主をほめたたえている異邦人が、エッサイの根、つまりダビデの子であるキリストに望みを置いている姿です。イザヤ 11 章 10 節からの引用ですが、キリストが来られて地上に神の国が建てられる幻の中で語られている言葉です。御国の中で、確かにイスラエルの民だけでなく、異邦人も一

員に加えられています。私たち異邦人も、ユダヤ人と共に、希望をもって「御国が来ますように。」という祈りを献げることができます。

¹³ どうか、希望の神が、信仰によるすべての喜びと平安であなたがたを満たし、聖霊の力によって希望にあふれさせてくださいますように。

先ほどは、忍耐と励ましの神とパウロは神を呼びましたが、ここは希望の神です。忍耐と励ましで、私たちが一致を保ち、そして主をほめたたえる中で心をつにします。そこには、希望が見えています。神ご自身の希望、キリストが支配される神の国が来るとい希望です。その希望があつて、私たちは喜びと平安で満たされます。喜びは、神の約束のことばを信じて初めて与えられます。平安も同じです。そして、その中で聖霊が注がれます。私たちが希望を抱くのは、聖霊の力によらなければ抱き続けることができません。

2A 宣教の旅程 14-29

そしてパウロは、自分の使命と働きについて話していきます。

1B 異邦人のささげ物 14-16

¹⁴ 私の兄弟たちよ。あなたがた自身、善意にあふれ、あらゆる知識に満たされ、互いに訓戒し合うことができると、この私も確信しています。^{15a} ただ、あなたがたにもう一度思い起こしてもらうために、私は所々かなり大胆に書きました。

パウロは、これまでローマ人への手紙で、かなり大胆に訓戒を与えてきました。彼は親しみを込めて、「本来、あなたがたも互いにそれができると確信しています。」と言っているのです。パウロがいなくとも、このような訓戒を与えることができると。

「善意」とは、聖霊の与えるところの特性で、良い品性のことです。訓戒をするのですが、相手が間違っている部分も指摘するのですが、それは悪意からではなく善意から言う力ですね。そこから溢れてくるところにある訓戒です。そして、イエス・キリストを人格的に知っているところの知識に満たされて、その関係にある知識に満たされています。こういったことが彼らはできるけれども、自分自身は、「あなたがたにもう一度思い起こしてもらうために」書いていきました。もう知っていることなんだけれども、思い起こすということはとても大切です。私たちも、信仰による義、神の恵みは真新しい知識ではなかったかもしれません。けれども、その真理を思い起こすことによって、その中に新たな思いで生きることができます。

^{15b} 私は、神が与えてくださった恵みのゆえに、¹⁶ 異邦人のためにキリスト・イエスに仕える者となったからです。私は神の福音をもって、祭司の務めを果たしています。それは異邦人が、聖霊によつ

て聖なるものとされた、神に喜ばれるささげ物となるためです。

パウロは、「異邦人のためにキリスト・イエスに仕える者となった」と言っています。他の使徒、たとえばペテロは、割礼を受けた者の使徒とガラテヤ書の方で書かれています。主にユダヤ人に対して福音を伝える使徒として召されているのに対して、パウロは異邦人のために主に仕える人となりました。まず、「神が与えてくださった恵みのゆえに」と言っています。彼は自分がいかに罪深いかを知っていました。キリストの弟子たちを迫害したのですから。それでも、神が憐れみ、自分を救い、そして異邦人に福音を伝える器として選ばれたのです。神の恵みなのです。

そして「仕える人」という訳がいいですね。権威をふるまう人ではなく、あくまでも仕える人です。そして、だれに仕えているかという、「キリスト・イエス」ご自身であります。異邦人ではなく、主ご自身です。私たちが忘れて、主ではなく、その人々に仕えていると思えば、その人々が自分の期待どおりに変わってくれない時に失望します。そうではなく、主ご自身に仕えるというところで、忠実に仕えることができるのです。

そして、「私は神の福音をもって、祭司の務めを果たしています。」と言っています。これは比喩的に話しています。異邦人をいわば、神への供え物として、彼らを神の前に捧げたということの意味しています。ローマ 12 章 1 節でそのことを話していました。「あなたがたのからだを、神に喜ばれる、聖なる生きたささげ物として献げなさい。それこそ、あなたがたにふさわしい礼拝です。」私たちが、聖霊によって聖なるものとされていて、神に喜ばれているささげ物であれば、とてもうれしいですね。パウロがここで大胆に書いてくれたことによって、私たちもそのように整えられていることを願います。

2B これまでの神への奉仕 17-21

1C キリストにある誇り 17-19

¹⁷ですから、神への奉仕について、私はキリスト・イエスにあつて誇りを持っています。

キリスト・イエスにある誇りです。異邦人を救う神のお働きは、ともするとユダヤ人信者たちから見れば、それほど重要なことではない、注目に値しないものかもしれません。けれども、主ご自身は認めておられます。神に対する立派な奉仕であり、栄誉あることだと思っています。こうした健全な誇りはとても大切です。私たちの働きがどんなに些細に見えていても、主ご自身は見ておられます。そこには恵みがあり、誇り高きことなのです。

¹⁸ 私は、異邦人を従順にするため、キリストが私を用いて成し遂げてくださったこと以外に、何かをあえて話そうとは思いません。キリストは、ことばと行いにより、¹⁹ また、しるしと不思議を行う力と、神の御霊の力によって、それらを成し遂げてくださいました。こうして、私はエルサレムから始めて、

イルリコに至るまでを巡り、キリストの福音をくまなく伝えました。

パウロが話すことは、あくまでも、「キリストが私を用いて成し遂げてくださったこと」であります。自分が成し遂げたことではなく、キリストが成し遂げてくださったことです。ですから、その誇りとは、キリスト・イエスに仕えているところの誇りであり、この方の仕え人としての誇りです。ここを読むと、主語がキリストになっていますね。キリストが自分を通して、ことごとく行い、しるしと不思議を行う力、御霊の力によって、異邦人が信仰に従順に至るといふ偉業を成し遂げられたのです。パウロではなく、キリストが行われたのです。私たちも、キリストがなされたことを話していきたいですね。

そして、その宣教はエルサレムから始まりました。彼はダマスコに行く途上で、主イエスに出会い、それからアラビア地方に行き、そしてエルサレムに行きました。エルサレムにおいて、逃げなさいと主ご自身に言われて、故郷タルソに戻りましたが、バルナバが彼を捜し、異邦人が救われているアンティオキアに連れてきたのです。それから、小アジアにおける宣教の旅が始まったのです。

パウロがここで、「イルリコに至るまでを巡り」と言っています。イルリコは、マケドニア地上の北にあるローマ属州ですが、この「イルリコに至るまで」は、イルリコの中に入ったというよりも、その手前まで、その地方に近くにまでということでしょう。使徒の働きには、マケドニア人が助けてくださいと、パウロの夢の中で語ったように、テサロニケやベレアなど、マケドニア地方までは行きましたが、イルリコ地方まで行ったことは書いていないからです。いずれにしても、パウロがここで言いたかったのは、「キリストの福音をくまなく伝えました」ということです。エルサレムからアジア、そしてイルリコの辺りまで、その一帯をくまなく伝えたということ。イエス様が伝えられた、次の命令に従ったのです。「マル 16:15 全世界に出て行き、すべての造られた者に福音を宣べ伝えなさい。」

今の宣教において、まだ伝えられていない地域を、「未伝地域」と言ったりします。未だ伝えられていない地域です。英語では、unreached area と言います。まだ伝えられていないところに伝えるべく、聖書翻訳の奉仕をしているので、ウィクリフ聖書翻訳協会があります。まだすべての言語に訳されているわけではなんですね。そして、3年前、2018年11月に、26歳という若さで、一人の宣教師が殺害されました。ジョン・アレン・チャウさんと言いますが、インド洋に浮かぶ島で、センチネル人という、石器時代に近い生活を営んでいる部族がいますが、彼らに近づいたところ矢に刺させて死んでしまったのです。¹なぜそこまでして？と思うかもしれませんが、イエス様の命令に従っているのです。「すべての造られた者」に対して福音を伝えます。

2C 語られていない場所での福音 20-21

それだけでなく、パウロは、他の人がまだ伝えていないところで福音宣教をしています。

¹ <http://www.logos-ministries.org/blog/?p=8544>

²⁰ このように、ほかの人が据えた土台の上に建てないように、キリストの名がまだ語られていない場所に福音を宣べ伝えることを、私は切に求めているのです。²¹ こう書かれていますとおりです。「彼のことを告げられていなかった人々が 見るようになり、聞いたことのなかった人々が 悟るようになる。」

パウロのような使徒は、まだ福音が語られていないところに語り、そこに土台を据えることが願いました。コリント第一において、パウロは、自分の後に来る多くの教師と呼んでいる者たちが、パウロの据えた土台に、偽りの教えを据えようとしていたのを知って、こう言いました。「I コリ 3:10-11 私は、自分に与えられた神の恵みによって、賢い建築家のように土台を据えました。ほかの人がその上に家を建てるのです。しかし、どのように建てるかは、それぞれが注意しなければなりません。11 だれも、すでに据えられている土台以外の物を据えることはできないからです。その土台とはイエス・キリストです。」パウロの使徒職を否定して、自分たちこそがエルサレムから来た教師だと言っていたのですが、パウロはイエス・キリストという土台を据えたのであって、それ以外に何を建て上げられるのか？ということなのです。立てられていくものが、偽物になってしまいます。

土台を据える働きもあれば、その上にしっかりと後継者が築き上げる働きもあります。しかし、土台を据えた人の働きを否定し、同じところで自分の働きを展開する人々がいます。それは教会に分裂を引き起こすだけでなく、自分のしていることによって、その受けた人々はイエス・キリストから遠ざかっていくことでしょう。もし本当に召されているのであれば、人の働きではなく自分自身が違うところにおいて、新たな働きをするはずなのです。

宣教の歴史の中に、また今でも、パウロのような、全く新しいところでの開拓宣教をする人々がいます。今、アフガニスタンが大きなニュースになっていますが、地下教会はかなり成長していたそうです。タリバンによって大きな迫害を受けています。その始まりは、クリスティー・ウィルソンという人です。彼は、イランへの宣教師の家族で育ちました。まだ幼い時に、共に働いていた牧師が彼に、「大きくなったら何をしたい？」と尋ねました。クリスティーは、親がいつもイランの東にあるアフガニスタンのために祈っているのを見ていました。それで、「アフガニスタンに宣教に行きます。」と答えました。「そこには、だれも宣教師が行ったことがない。」と言ったら、クリスティーは、「だから、私が最初の宣教師になります。」と答えたのです。彼は、そこに誰もクリスチャンがいないことを知って、それで宣教師になりたいと思いました。その願いは主からもので、22 年間、働きをしました。² こうした、先駆者的な働き、使徒的な働きがあってこそその宣教の広がりののです。

3B これからの働き 22-29

1C イスパニア道中での訪問 22-24

²² そういふわけで、私は、あなたがたのところに行くのを何度も妨げられてきました。²³ しかし今は、

² https://www.cslewisinstitute.org/Life_of_J_Christy_Wilson_Jr_Full_Article

もうこの地方に私が働くべき場所はありません。また、イスパニアに行く場合は、あなたがたのところに立ち寄ることを長年切望してきたので、²⁴ 旅の途中であなたがたを訪問し、しばらくの間あなたがたとともにいて、まず心を満たされてから、あなたがたに送られてイスパニアに行きたいと願っています。

パウロは、手紙の冒頭で、福音を伝えたいと思っても、何度も妨げられたことを話していました(1:13)。けれども、もうすでにローマの教会がしっかり建てられていて、その地域全般がすでに福音が宣べ伝えられています。ですから、次なる宣教地は、アドリア海を超えたローマではなく、さらにその先になったのです。それが、「イスパニア」スペインです。イスパニアに行くのなら、陸路にしる、海路にしる、必ずローマを中継地としなければいけません。それで、ローマに立ち寄ろうとしています。そこで、彼が行ないたいのは、福音宣教というよりも、「しばらくの間あなたがたとともにいて、まず心を満たされてから、あなたがたに送られてイスパニアに行きたい」ということです。

彼が励まし、また彼らからも励ましを受けながら、兄弟たちの交わりにある豊かさを経験して、それから、彼らによって遣わされてイスパニアに行くと行っています。つまり、第三の拠点です。第一の拠点はエルサレムでした。異邦人宣教は、第二の拠点、アンティオキアがあります。けれども、イスパニアはアンティオキアからも遠く離れています。それでローマにある教会が拠点となり、そこから彼が遣わされてイスパニアに行くということです。

2C エルサレムでの奉仕 25-29

1D 貧しい聖徒たち 25-27

²⁵ しかし今は、聖徒たちに奉仕するために、私はエルサレムに行きます。²⁶ それは、マケドニアとアカイアの人々が、エルサレムの聖徒たちの中の貧しい人たちのために、喜んで援助をすることにしたからです。

パウロは今、ローマ人への手紙を書いている時はコリントにいます。ですから、そのままローマ行ってもよさそうなものを、一度、エルサレムに戻って、それから行くという予定を立てました。使徒の働きで、コリントにいる時に彼が示されて、エルサレムに行ってからローマに行かなければいけないと示されていました。そこで、彼が神殿にいた時にユダヤ人たちが騒ぎだして、そこで証しをしましたが、彼には大きな重荷が与られていました。それは、エルサレムにいる兄弟たちは困窮していたのです。

なぜ、彼らは貧しくなっているのでしょうか？一つに、エルサレムにいる兄弟たちに大飢饉が襲ってました。それで既に、アンティオキアにいる兄弟たちが救援物資をユダヤの兄弟たちに送っています(使徒 11:29)。次に、彼らは迫害を受けていたので、経済的に逼迫していたことでしょう。そして、彼らの財産の運営に問題があったかもしれないです。彼らは財産を全て共有しました。そ

のような共産制には無理があったかもしれません。それで貧しくなりました。

いずれにしても、その貧しい人たちに援助したいと思いました。それで、エルサレムに行く道中で、テサロニケなどのマケドニア、コリントなどのアカイアの教会の人々に、援助をお願いしたのです。すると、彼らは喜んで献げることを願いだしたのです。これは、素晴らしい証しですね。このようにして、ユダヤ人と異邦人がキリストにあって一つに結ばれているということが具体的な、慈善の行いによって示されることとなります。私たちは、言葉や理論上で教会が一つになっている以上に、具体的に一つであること示す恵みがあるのだということを知る必要があります。

²⁷ 彼らは喜んでそうすることにしたのですが、聖徒たちに対してそうする義務もあります。異邦人は彼らの霊的なものにあずかったのですから、物質的なもので彼らに奉仕すべきです。

ユダヤ人の信者たちによって、福音が広がり、彼らの働きによって異邦人が霊的に恩恵を受けました。この労苦と愛があってこそその異邦人教会なのです。ですから、霊的に恩恵を受けたのだから、物質的に奉仕すべきということを話しています。これは、福音の働きをしている人にも同じ原則を、パウロは話していますね、「I コリ 9:14 同じように主も、福音を宣べ伝える者が、福音の働きから生活の支えを得るように定めておられます。」

2D キリストの祝福への期待 28-29

²⁸ それで私はこのことを済ませ、彼らにこの実を確かに渡してから、あなたがたのところを通過してイスパニアに行くことにします。²⁹ あなたがたのところに行くときは、キリストの祝福に満ちあふれて行くことになるかと分かっています。

エルサレムに行ったパウロは、騒動が起こり、それでローマに捕えられてカイサリアにいて、それから船でローマへと渡ったということを使徒の働きの中で見ます。ここで、「キリストの祝福に満ちあふれて行く」というのは、「この結実に確認の印が押される」という意味合いがあります。異邦人の間に、確かにユダヤ人に奉仕するできたということ、そこにキリストの祝福が満ちています。教会が確かに一つなのだという祝福です。

4B エルサレムへの旅のための祈り 30-33

³⁰ 兄弟たち。私たちの主イエス・キリストによって、また、御霊の愛によってお願いします。私のために、私とともに力を尽くして、神に祈ってください。

エルサレムに行くにあたって、パウロが切なる祈りの要請をしています。宣教の働きのためには、パウロは臆することなく祈りを要請しました。なぜなら、祈りが必要だからです。「力を尽くして、神に祈ってください」と言っています。力を尽くすということは、労苦するということです。努力するとい

うことです。執り成しの祈りには、労苦が伴います。執り成しの祈りについて、エペソ人への手紙にはこう言っています。「エペ 6:18 あらゆる祈りと願いによって、どんなときにも御霊によって祈りなさい。そのために、目を覚ましていて、すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くして祈りなさい。」御霊によって祈りなさい、と言っていますね。これは、御霊の助けなしには祈ることさえできないからです。本文にも、「御霊の愛によってお願いします」とあります。御霊によらなければ、この旅において、パウロのことを愛し、祈りに労することさえできないのだということです。祈り自体が、そううった霊の戦いです。

次に祈りの課題を三つ挙げています。

³¹ 私がユダヤにいる不信仰な人々から救い出され、エルサレムに対する私の奉仕が聖徒たちに受け入れられるように、³²また、神のみこころにより、喜びをもってあなたがたのところに行き、あなたがたとともに、憩いを得ることができるよう、祈ってください。

一つ目が、「ユダヤにいる不信仰な人々から救い出され」ることです。パウロは常に、ユダヤ人の不信者から危害を受けそうになり、逃げていました。そしてエルサレムに行く時には、死ぬことさえ覚悟していました。けれども、彼らから救い出されるようにと祈っています。事実、使徒の働きを見れば、彼はもみくちゃにされて死にかけました。陰謀を企て彼を暗殺しようとする者たちがいました。間一髪でパウロは助けられました。

次に、「エルサレムに対する私の奉仕が聖徒たちに受け入れられるように」ということです。異邦人信者たちからの愛の奉仕、援助が快くユダヤ人の兄弟たちに受け入れられるようにということです。持っていても、その意味する所を知らなければ意味が無くなってしまいます。このことによって、交わりの恵みにあずかれるようにという祈りです。

最後に、「神のみこころにより、喜びをもってあなたがたのところに行き、あなたがたとともに、憩いを得ることができるよう」ということです。神援助金による奉仕が受け入れられたのであれば、神の御心によって喜びを持つことが出来るでしょう。そして、その喜びを持って行って、ローマにいる信者たちと、憩いの時を持つことが出来るようにと書いています。ローマにいる人々は既に信者である場合が多いですから、パウロは励ましを与えると同時に、彼らの中において休みを得ることが出来ると思います。キリスト者たちと共にいることは、霊的にリフレッシュされます。使徒の働きを見ると、彼は囚人としてローマに入ります。けれども、最後の最後に、こう書いてあります。「28:30-31 パウロは、まる二年間、自費で借りた家に住み、訪ねて来る人たちをみな迎えて、³¹ 少しもはばかることなく、また妨げられることもなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストのことを教えた。」祈りが聞かれたことでしょう。

³³どうか、平和の神が、あなたがたすべてとともにいてくださいますように。アーメン。

15章には、神が、忍耐と励ましの神、そして希望の神として描かれています。そしてここでは、平和の神です。私たちが、神を見上げる時に、そのような神として期待していますでしょうか。忍耐と励ましを下さる神。希望を見せてくださる神。そして平和で満たして下さる神です。平和の神が、共にいてくださいますように、と祈りをささげ、最後にアーメン、と言っています。その通りです、ということでは終わっています。けれども、16章があります。教会のいろいろな人の名をあげて、挨拶をしています。ここに、パウロがどれほど人々とのつながりがあったかを知ることができます。